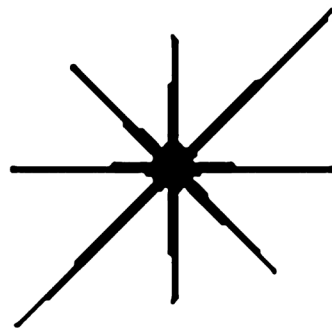


コメット通信 30

[’23年1月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

崖の下のララ

—旅のみやげ3

野村喜和夫

定理のように言えば、ひとりよりもふたりのほうが世界は深い。そして夜よりも昼のほうが世界は深い。というのも、こんなことがあったからだ。

私は女とタクシーの後部座席に乗っていた。女は私の妻、あるいは妻となるはずの人で、私たちはおそらく、とある高原のコンサートホールで行われる音楽祭に向かう途中だった。もちろん関係者としてではなく、一観客として。私たちは幸せだった。ふたりでいることの幸せを存分に楽しんでた。ふたりでいること、いやむしろふたりであること、それはあたかも、労働者であるとか、同じ言語を話す者であるとか、私たちをめぐるほかのあらゆる規定を超えて、世界へとゆるぎなく臨んでいるかのようにだった。

高原にはよく知られた温泉街があった。8月下旬のある日、午後遅く、私たちはそのとある老舗の温泉宿にチェックインして、部屋に案内されたあと、しかし温泉には入らず、そのままタクシーを呼んで音楽祭の会場に向かったのだ。音楽祭といってもロックフェスティバルのような大掛かりなものではなく、クラシック音楽を主体とした小規模なもので、それでも毎年、この高原の夏の終わりを彩るイベントとして、一週間にわたって行われるのである。

女を私に引き合わせたのは、しかし音楽ではなく美術だった。いつだったか、都心のとある美術館で、「マン・レイと女性たち」というタイトルのもと、シュルレアリスム系の美術家マン・レイの大々的な回顧展が行われたことがあった。詩人である私は、シュルレアリスムに並々ならぬ関心があり、またその運動からかなりの影響も受けていた。なので、その回顧展にもいそいそと出かけていったのだ。

タイトルのせいか、女性の鑑賞者が多かった。女性がマン・レイの写真作品のモデルになるというのは、半分オブジェになる、つまりモノ扱いされるということだが、今の女性には抵抗がないのだろうか。たとえば、ソラリゼーションという手法を施されると、まるで金属でできたような女体の輪郭が浮かび上がる。しかし、見て歩く女性たちは楽しそう。作品へのリスペクトは時代の空気を越える、ということだろうか。

展示を一通り見終わった私は、そんなつまらないことを考えつつ、出口につづくアートショップに立ち寄った。あれこれ記念のグッズを見ているうちに、写真家というイメージが強いマン・レイの希少な油彩のひとつ、まだら模様の空に巨大な赤い女の唇が浮かんでいるあの有名な「天文台の時刻に——恋人たち」のミニレプリカがあるのを目に留めて、それを買い求めようと手を伸ばした。すると偶然、もう一つの手が伸びてきて、ミニレプリカの手前で触れ合ってしまった。それが女の手だったのである。

「どうぞ」と私が譲ろうとすると、

「どうぞ」と女も言う。それで私たちは思わず笑い合ってしまった。

「趣味が合いますね」と私は、ナンパする男のように、ためらいのみじんもなく言葉を発した。

「唇の？」と女は尋ねた。

「ええ、唇の」と私は答えた。

なんとなく淫猥な禅問答のようだった。おまけに、運悪く、あるいは運よく、そのときミニレプリカは一つしかなかった。女は私にそれを譲った。お礼に私は、女を美術館に隣接するフランス風のカフェに誘ったのだった。私がベルギーの白ビール、ヒューガルデンホワイトを注文すると、女は、「私もそれが好きなんです」と、同じビールを注文した。なんとも不思議なくらい趣味が合う。私がひと足さきにビールを飲み終える頃には、ふたりとも離婚歴があり、子供はいないこと、そしてなんとなくこれからのパートナーを探していること、などがわかった。

「ところで、さっきの唇ですけど」と私は、別れ際に言った。「よく見ると、恋人たちの裸体が重なり合っているようにも見える。気づきましたか」

「えっ、ほんとうですか」

「ええ、マン・レイ自身がそう述べているんです」

それから間もなくのことだった、私と女が、あの空に浮かぶ上下の唇を真似て、裸でぴったり重なり合うような仲になったのは。

道は高原の森を縫ってすすんだ。高原をぐるりとひとまわりする周遊道路で、温泉街を過ぎると、ナラやカラマツの木立越しに、別荘やペンションの建物が散在するようになった。左手にスキー場が見えてきたところで、タクシーは右折して周遊道路から離れ、別の山の中の道に入った。道の片側に深い谷がのぞいたりして、高所恐怖症の私は少し足がすくむ感じがしたが、女の方は気にもならないらしく、快活に音楽祭のプログラムのことなどを話していた。

「武満徹がビートルズの曲を編曲しているなんて、知らなかったわ。やっぱり、現代音楽風になるのかしら」

地形が平坦に戻ったところで、私はようやく応答した。

「武満徹という作曲家は、独学だったせいかな、自由な発想ができたんだね。それゆえの軋轢もあった。尺八や琴を取り入れた『ノヴェンバー・ステップス』も、初演の時はかなり抵抗があったらしい。アメリカのオーケストラだったけど。きょうは室内楽だろうね、会場も狭いから」

「でも、楽しみね」

私は頷いた。ふたりでいることの幸せを噛みしめるように、大きく頷いた。ただ、演奏するのは誰だっけ、なんというグループだっけ、そのことが少し気にかかり、それを女に確かめさせようとしたそのとき、道がとあるカーブにさしかかった。それを曲がるとトンネルである。左側は崖になっている。ちらっと見ると、なんとガードレールがない。まさかこんな高原リゾートの林道にガードレールがないなんて、信じられなかったが、ないものはないのだった。私はまた、なおいっそう足がすくむ感じがして、件の質問はトンネルに入ってからにしようと思った。

運転手はスピードも緩めないまま、ぎりぎりまで真っ直ぐにすすんで、「おいおい、大丈夫か」と思っていると、それから急ハンドルを切ってカーブを曲がろうとした。ところが、一瞬曲がりきれず、脱輪して車の左半分が宙に浮いた。そのとき、遠心力によってか、ドアが開いて、女が外に振り落とされた。というか、座席がそのままストンと抜けたようになって、そこから女は谷底に向かってほとんど垂直に落下していったかのようだった。私は手を差し伸べるひまもなかった。

なのに、その一瞬は、時間が止まった、とまではいえないにしても、途方もなく長く伸びたように感じられた。落ちてゆく瞬間の女の表情をいまもよく覚えている。恐怖というよりは驚愕の表情であり、「なぜ私が、私だけが」という思いが顔いっぱいになり、頬には恥じらいの赤らみが差したようにさえ見えた。その顔がスローモーションのようにすうっと下方に消えてゆく。それをゆっくりと見送りながら、私、というか私の身体は、すぐさま、何ごともなかったかのように座席で車の前方に

向き直り、車も脱輪を難なく乗り越えてカーブを曲がりきり、トンネルに入っていった。それはまるで、落下した女と、とどまった私と、そのはざまに、重力の支配する世界と重力の及ばない世界とが、一瞬くっきりと分かれたみたいだった。こんな過酷な、理不尽な分割が起こりうるのだろうか。

このときほど存在について、私たちが存在するということについて、震撼させられたことはなかった。私は昔見た映画の一シーンを思い出した。スタンリー・キューブリック監督の名画『2001年宇宙の旅』のラスト近く、ハルというコンピュータの反乱によって宇宙船は統御不能となり、ポーモン飛行士は宇宙空間に放り出されてしまう。恐怖に見開かれた彼の眼。宇宙空間の恐るべき無音の漆黒の闇を、どこまでも落ちてゆく宇宙服姿。ちぎれた命綱を、干からびた臍帯のように漂わせながら。

トンネルを抜けたところで私は運転手に大声を発し、車をとめさせた。

「ふざけんよ」

「えっ？」

「責任は後で取ってもらうとして、とにかく彼女の安否を確かめなくては」

「彼女？ 安否？ 何言っているんですかお客さん、ずっとひとりですよお客さんは」

「ふざけるのもいい加減にしろよ。あんたが乱暴な運転をして、ドアまで壊れているもんだから、彼女は振り落とされてしまったじゃないか。過失傷害致死、いや殺人だよ」

運転手は、一瞬わけがわからないという表情を顔に浮かべ、しかしつぎの瞬間には、狂人を相手にしているという恐怖の表情に変わり、硬直した。私は運転手のIDカードをスマートフォンに撮って、激怒とともに車の外に出た。何はさておき事故の顛末を見届けなければならない。念のためスマートフォンで女に電話してみたが、応答はない。あの崖の高さだと、女は何度か岩に当たってバウンドしたあと、地面に激しく叩きつけられて、ほぼ即死だろう。女へのかぎりない憐れみと女を失った絶望感が私を襲った。女は私の妻、あるいは妻となるはずの人だった。

そのときふと、うっすらとながら、罪の意識にも襲われた。女が落下したとき、私はほんとうに手を差し伸べるひまもなかったのか。ためらいの一瞬のようなものが、もしかしたらあったのではないか。そのわずかゼロコンマ数秒ぐらいのあいだに私は手を差し伸べ、女を救おうとするべきだったのではあるまいか。仮にその姿勢のまま、引きずり込まれるようにして、女と一緒に落下してゆく羽目になったとしても。

タクシーを止めた林道から、細い道がヘアピンを描いて、森の中をさっきの崖のほうに伸びていた。道の入り口のナラの木に立て看板がくくりつけられて、「熊出没注意」とある。おいおい。でも、トンネルのある山の縁を回っているらしいこの道を辿れば、女の墜落現場に行けるかもしれない。確信はなかったが、そうするしかなかった。私は歩き始めた。最初は道も道らしく踏み固められ、森の中の遊歩道という感じで快適だった。ところが、道は途中からさらに細くなり、ほとんど獣道のような状態になった。それこそ、ほんとうに熊が出るかもしれない。おまけに、右下は急勾配の斜面になって来た。滑り落ちないように慎重に下草を踏み、躓かないように木の根にも注意しながら、私はすすんだ。すすむしかない。生い茂る木の小枝が行く手を阻むこともあり、それを払ったり、ときにつかまったりもした。ナラの木が多かったが、ブナ、カエデの類の葉も確認され、秋には見事な紅葉黄葉の錦織を織りなすのだろうが、いまは緑一色で、息苦しいほどだ。

どのくらい歩いたのだろうか。さらにそのさきの途中では、道を見失ったと思った。しかし彼女を見つけなければ。その思いが道を、道なき道を、木々のあいだになお存在させているかのようだった。そのうちに不意に道が広がり、林間の空き地、いや、踊り場のようなところに出た。見上げると、崖が見え、トンネルの入り口が半分ほど見える。ガードレールも何もない。あそこだ、あそこから落ち

たにちがない、と私は思った。驚いたのは崖の高さだ。さっき車の中からは、奈落の底にしか見えなかったのに、もう一度見上げて、目測で距離を測ってみると、せいぜい10メートルぐらいしかない。これなら、打ちどころさえ悪くなければ、腰か足を強打するくらいで、一命は取り留めているかもしれない。

しかし、肝心の女がないのである。私は崖の下の草地をくまなく眼で探したが、どこにも見当たらない。気絶して倒れたまま、草深くに埋もれてしまっているのかもしれない。私は丈高い草をかき分け、一步一步踏みたしかめるように歩いた。しかし、見つからない。私はふと、さっきの運転手とのやりとりを思い出した。「何言っているんですかお客さん、ずっとひとりですよお客さんは」。運転手の言う通り、女とはつまり、私の妄想の所産であって、最初から私はひとりだった？

まさか。それこそ妄想だ。私は頭を振って弱気を払い落とし、女の搜索をつづけた。草地はそのまま平地林につづき、その向こうには、樹間越しに、きれぎれに林間のキャンプ場が見えている。さっきタクシーに乗っていたときは、ほとんど人の姿を見かけない山中という感じだったが、案外そうではないのかもしれない。平地林は手入れがされていて、下草の類もほとんどなく、今までの鬱蒼とした斜面の森とは大違いだ。私は反射的にそこをキャンプ場に向かって歩き始めた。女もまた、転落して怪我したものの、立ち上がり、ひとりでキャンプ場のほうに歩いて、どこか救護所のようなところを目指したのではないか。あるいは、たまたま事故現場の崖下を通りがかった誰かが、倒れている女を見つけて、担架で救護所まで運んだのだ。そう、そうに違いない。私は念のためスマートフォンを取り出し、LINEや電話の着信履歴を調べてみたが、女からのメッセージはなかった。こちらからも再度電話してみたが、やはり応答はない。

この上は自分で女の居場所を探すしかない。そうして彼女を救うのだ。あの、存在することの深淵、あるいは世界の深さが彼女にだけ開いたことへの驚愕の表情、もしかしたら恥ずかしさをも含むあの赤らみの表情から救うのだ。

平地林をキャンプ場の方へと歩くとすぐに、キャンプ場の利用客だろうか、チェックのシャツにカーキ色のベストを着た男に出くわした。初老のその髭面に、思い切って私は尋ねた。

「さっきあの崖から人が落ちたんですけどね」

そこからはまだかろうじて崖が見えたのである。すると男は、「自殺？ 低すぎるよ、死なないんじゃないかな」と、冗談には冗談をもって返すのが礼儀とばかりに、ニヤリと笑ってそう言ったあと、木立の奥に消えてしまった。

仕方なく私は別の目撃者を探して、キャンプ場の中まで入っていった。色とりどりのテントが見え、木立の間にはバンガローがいくつも見える。そろそろ夕暮れが近いからだろう、夕食のバーベキューの準備を始めているグループもいる。しかし、救護所もしくはクリニックのようなところはどこにも見当たらなかった。

キャンプ場は、地獄谷と呼ばれる渓流の河原に続いていた。河原のところどころから温泉が湧出し白煙が上がるので、そう呼ばれているらしかった。地獄谷の先は温泉街になっている。そこまで行けば、さすがにクリニックの一つや二つあるだろう。そう思って、河原の遊歩道を歩き始めようとすると、向こうから、消防服のようなツナギを着て長靴を履いた若い男がやってきたので、もしやと声をかけてみた。

「あのう、さっき向こうのあの崖から」と私は、もはや視界から見えかかっている崖を指しながら言った、「人が落ちたんですけどね」

また冗談にとられるのではないか。ふとそんな不安がよぎった。

「ああ、女の人ですね」

「え、ええ、そ、そうです」

私はまるで、女の安否より何より、自分の話が通じたことに安堵したかのように、一瞬顔をゆるめた。「その人なら、私たちが発見して、救護所まで運びました。怪我をしていますけど、命に別状はないみたいですよ」

「ああ、それはよかった。助けてくださったんですね」

私は、できればその場にへたり込みたいくらいに、今度は正真正銘、安堵した。そして、やや遅れてお礼を言うと、男は照れ臭そうに笑い、

「案内しますよ、すぐそこですから」と、地獄谷の入り口にある救護所まで案内してくれた。なんだこんなところにあつたのか。何度も通りかかった白いテント張りの小屋、それが救護所だった。

「この中に女性はいます」

男はそう言って、キャンプ場の方へ立ち去った。私は丁重にお辞儀をして彼を見送った。テントの中に入ると、奥にさらに仕切られたスペースがあり、覗くとそこに女はいた。ベッドの上に座り、口は半開きで、憔悴しきったような顔をしている。無理もない、あんな運命の仕打ちを受けたのだから。女は紺のワンピースを着ていたが、崖から落ちたときのものだろう、泥がついていた。顔には擦り傷もあった。私は仕切りの中に入り、

「ララ」と声をかけた。ということは、女の名前はララというのにちがいない。しかしあまりにも嘘っぽい。どこからか、古い欧米の映画のテーマ音楽が、情感たっぷりに流れてきそうだった。たとえば、パステルナークの同名の小説を映画化した『ドクトル・ジバゴ』を私は観たことがあり、そのヒロインの名前がララというのだった。それですぐさま、ララという名前は消え去っていった。女はただの女に戻った。私がただの私であるように。そしてさらに何かいたわりの言葉を探していると、女のほうから言葉が出た。

「あなたいつも遅いんだから」

私はふと、女の名前はウラかもしれないと思った。萩原朔太郎の詩に「猫の死骸」というのがあり、そこでは、逢引の場で話者を待っていた女の亡霊が、「あなた いつも遅いのね」と言う。その女の名前が「浦」というのである。

「ごめん、これでも現場から慌ててタクシーを降りて、きみを探したんだ」

「そう」

女はあきらかに私に対して距離を置いているようだった。

「で、どうなの、怪我の具合は」

「これから応急処置を受けるところなの。だから、少し外で待っていて」

「そうか、そうするよ、外で待っていればいいんだね」

私はその場にいた看護師らしき女性に、「外にいるので、処置が済んだら教えてください」と伝え、テントの外に出た。

近くの白樺の木立の下にベンチがあつたので、そこに座った。背後から斜めに射してくる西日は、もう夕陽に近かった。そのときはじめて、コンサートのことが頭をよぎった。武満徹の曲は、比較的プログラムの最初のほうだったので、もう演奏されてしまったに違いない。締め曲はたしかシェーンベルクの「浄められた夜」だったと思い出しながら、私はあらためて、いまの短い会話のやりとりを再現してみた。女の言葉のあのよそよそしさはなんなのだろう。言葉ばかりではない。再会できた彼女の顔を脳裏に浮かべてみた。それは擦り傷があるだけではなかった。どこか青ざめ、いっぺんに

十年も老けてしまったような、いや、ほとんどもう亡霊のような顔だったことに、いまさらのように気づいた。痛覚からやや遅れて、血がおもむろに流れ出してきたように。

待っているあいだ、手持ち無沙汰になんとか自分の掌や手の甲を眺めているうちに、ふと女との性愛の場面が蘇ってきた。つまり手指の感触のほうが、あれこれの視覚より、女の乳房や腹から腰にかけてのラインをそっくりそのまま覚えているのだ。そのことに私は少なからず驚いて、いっそう女のことが愛おしくなった。

私は思い出していた。交接して佳境に入ると、「首を絞めて」と女は言うのだった。その通りにすると、女は一段と喘ぎ声を高めて、それだけではない、膣の締めりもすごくなって、私の分身もキュウキュウと喜びの声をあげるのだった。

そんな愚にもつかない情交の思い出にひたるうち、いつの間にか、私はうとうととしてしまったのに違いない。

すると私は不意に家の中において、女の家だが、居間のソファに座り、それなりに寛いでいる。今夜は何を女に食べさせてやろうか。憚りながら、料理が趣味なのである。ところが、そこから状況が一変した。女が言うには、昨日から鰐を飼い始めました。鰐？ ええ、鰐です。あのギザギザの歯の？ ええ。どこに？ まさか浴槽？ いいえ、浴槽にはではなく、床に。私はあたりを見回した。小さな鰐、あるいは鰐の子なので、危険はありません。しかし鰐は鰐ではないか。じっさい私は、そのとき以降、出会い頭に鰐を踏んだりして、ついでに噛まれやしないかと気が気ではない。それならば女に抗議すればいいではないか。鰐を外に出してくれ、でなければ自分が出ていく、ぐらいの気迫を持って。ところが、鰐との共生はあらかじめ取り決められていたかのごとくで、鰐を排除しようなどとは思ってもよらないことなのだった。こうしていても、深夜、いつものように歯を磨くため洗面所に行こうとするが、途中の廊下の暗がりでは何かモノを踏んだという感触が足裏にあり、すわっ、鰐か、と思わず飛びさる私――

とそのとき目が覚めて、まるで泳ぎ終えて水面から顔を出したときのスイマーのように、あたりを見回した。背後から来る夕陽に近い陽射しの角度、木立の影の長さ、ほとんどなんの変化もない。まどろんでいたのは、時間にして5分かそこらのことだったのだろう。そんな短い時間にも、何とも不思議な夢をみたものだ。鰐と女。揺れ動く。しかし私は、この恐るべき超現実的な関係をそれ以上は追求せず、ふたたび待機の時間へと全身を滑り込ませていった。

しかしいくら待っても、処置の終了を伝えにくるはずの看護師が姿をあらわさない。どうしたのだろう。腕時計で確認すると、救護所にたどり着いてから、少なくとも三十分以上は経っている。しびれを切らした私は、自分から救護所テントの中に入ってみることにした。

誰もいない。そんな馬鹿な、と思いながら、仕切られた奥を覗くと、ベッドに女の姿はなく、代わりに、顔に白布を被せられた人間が横たわっていた。遺体である。胸が少し盛り上がっている、女性だろう。ということは、私の妻あるいは妻となるはずの人以外にも、この救護所に運ばれてきた女の怪我人もしくは急病人がいて、いましがた息を引き取ったのだろうか。自分の手指に、またそこから繰り出される女との性愛の記憶に気を取られて、担架が運ばれてきたそのシーンを見過ごしてしまったのだろう。あるいはうとうとしていたあいだに運ばれたのだ。では、私の妻あるいは妻となるはずの人はどこに？ またも私は女を見失ってしまったのだ。しかし一瞬のち、私はさらに激しく動揺した。そうか、もっともありうる可能性、それはあの遺体が女自身のものであるということではないか。やはり、怪我は致命的なものだったのだ。医師が応急処置をしている間に、女は息絶えてしまったのだ。それで看護師はとりあえず白布を女の顔にかぶせたのだ。

だが、その布を手で取り去って、女が起き上がった。まさか。私はかつがれているのだろうか。死んだふりをして、女は私を驚かそうとしたのだろうか。唾然としている私に、
「処置が終わるまで待っていてと言ったのに」と女は悲しそうに言った。一段と青ざめた顔をしていて、これはもう死者の顔だ。

「いや、待ったよ。でも、いくら経っても誰も呼びに来ないものだから」

「それで覗いたのね。でも、仕方ありません、これがほんとうの私です。即死でした。あのとき、車が宙に浮いた瞬間、私とあなたの間には、あなたも感じ取ったように、存在のあり方の決定的な違いが生じてしまったのです。あなたはもう、私を連れて帰ることはできません」

私は女を見つめた。女も私を見つめた。時間にしてわずか十数秒だったが、同時にその十数秒が異様に引き延ばされて、いわく言いがたい時の流れが生じたようにも思われた。数分、あるいは数時間、あるいは数年。それは未来であり、過去であった。私たちは恐ろしいスピードで時間を駆け抜け、互いの顔に刻まれた老いの皺を認めたかと思うと、今度は時間が急速に過去へと遡りし始め、女との出会いにまで遡って、そこからいまに至るまでの思い出のすべてが、女と私を隔てた空間に、まるで高速のスライドショーのように映し出されるのだった。

いや、出会い以前にまで遡って。信じがたいことに、そこには女の葬式の光景も入っていた。とあるメモリアルホールの小さな部屋で、家族葬だったのだろう、参列者は数人しかいない。祭壇の中央に女の遺影が掲げられている。いまよりいくらか若く、優しげにほほえんでいる。ということは、女は数年前にすでに死んでいた？ しかしそのあと私は女と美術館で出会い、一緒に暮らすようになったのだ。そして例の、首を締められながらエクスタシーに達する女の顔まで浮かび上がるのである。

その半開きの唇が閉じられて、顔を離れ、浮遊し、そのあいだにものすごく大きくなって、森のスカイラインの上に浮かぶ。ふたりを引き合わせたマン・レイのあの絵、「天文台の時刻に——恋人たち」の巨大な唇のように。

わけがわからない。見つめ合ったあと、結局、私の方から眼をそらした。数秒のあいだ、ぐるりとテントの内部を見回して視線を戻すと、なんとということだろう、いつの間にか女は、ふたたび顔に白い布をかけられ、ベッドに横たわっていた。手は胸の上で組み合わせられて、完璧な遺体である。もう何時間も前から死んでいたというような。

惑乱のうちに私はテントの外に出た。私とすれ違った者は、私をまるで夢遊病者を見るような目で見送ったに違いない。晩夏の午後の日差しが額に強く当たる。まるで私だけ、黄泉の国から生還して、ありがたい地上の陽を浴びたというように。しかし、明らかに変だ。さっきまで、夕暮れに近い時間帯だったはずなのに、額に直射するこの日差し、これではまるで、時間が数時間戻ってしまったかのようではないか。

またしても時間が行ったり来たりしている？ 深くは追求することなしに、私はふらふらと歩いた。「ララ、ララ」と女の名前を繰り返しながら。いつの間にか、また名前が女に戻ってきていたのだ。しかしもう、遅すぎる。名前は生とともにあるべきではないか。

それにしても、なんと痛ましい運命なのだろう。事故のそのときまで、女は自分が死ぬなんて夢にも思わなかったのだ。そのことだけが私の念頭にあった。残酷すぎる。ふつう人は、生から死へ、多少とも時間の経過とともに移行してゆく。「ああ自分は死ぬんだ」という意識とともに、覚悟したり、生に執着したり、諦めたりしながら、その意識がフェイドアウトするように死んでゆくということもあろう。それに比べたら、女への死の訪れ方は残酷すぎる。もういちど女には、時間を取り戻させ、変な言い方だが、死らしい死を経験させてやる必要があるのではないか。

こうした奇妙な想念は、すぐさま深い喪の悲しみに変容した。エウリュディケを失ったオルフェウスのように、いまこそ私は、地獄下りをしなければならぬような気さえしてきた。しかしもうどうにもならない。あなたいつも遅いんだから。女は私の妻、あるいは妻となるはずの人だった。そうして私は、キャンプ場をよぎり、ナラの木立のあいだを抜け、例の崖の下のところまで戻った。信じられなかった。見上げると崖は首が痛くなるほど伸びていて、およそ 50 メートルはあろうかという高さだった。

定理のように言えば、ひとりよりもふたりのほうが世界は深い。そして、夜よりも昼のほうが世界は深い。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお） 1951 年生まれ。詩人、批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999 年、高見順賞）、『よるこべ午後も脳だ』（2016 年）、批評には、『オルフェウスの主題』（2008 年）、『[パラタクシス詩学](#)』（共著、2021 年）、『[シュルレアリスムへの旅](#)』（2022 年）などがある。